

簿記の授業に対する習熟度別クラス編成の学修効果に関する研究

手嶋 竜二（環太平洋大学） 金川一夫（九州産業大学）

1 はじめに

近年、大学の学修者は多様化してきている。多様化の要因は、国籍、人種、性別、年齢、家庭の経済力、および就業状況等と様々である。多様化した学力をもつ学修者に対する対策として、大学において科目の違いはあるものの習熟度別クラス編成が実施されている。習熟度別クラス編成は多様化した学修者に対応して学修効果が見込まれる。本研究の目的は、簿記の授業に対して習熟度別クラス編成の効果を明らかにすることである。

2 研究方法

2.1 習熟度別クラス編成に関する概要

習熟度別クラス編成は、それ自体の学修効果が認められ、かつ費用対効果が高い教育政策であることが明らかにされている。簿記の授業クラスを習熟度別に編成するにあたり、(1)共通のプレイスメントテストを行うこと、(2)共通の成績認定試験があること、そして(3)共通の成績評価基準があることを前提条件としている。編成の際には、厳密なクラス分けというより学修者の意思を尊重することも重要となる。また、シラバスの関係上、最終的な到達目標は同一としている。

2.2 研究方法

環太平洋大学経営学部、2018年後期（2018年9月から2019年1月まで）の授業「簿記演習」において、習熟度別クラス編成を実施し効果を測定する。

3 アンケートとその結果

調査期間は2018年9月から2019年1月までである。アンケートにより得られたデータはIBM® SPSS® Statistics ver.24により統計処理している。統計処理手法としては、アンケート項目の単純集計、クラス間を比較するためにMann-WhitneyのU検定、期間経過後の学修効果を調べるためにウィルコクソンの符号付順位検定を行っている。

4 考察

本研究では、簿記の授業に対して習熟度別クラス編成の効果を明らかにするために、アンケート調査を行い、そこで得られたデータを統計処理している。その結果、多様な学修者が混在している状況で習熟度といった1つの軸を用いて区分し、クラス分けするという対応は有意義であると考えられる。

